

基礎研究部門 仏教史・真宗史総合研究班

“The Hansei Zasshi”（『欧文反省雑誌』）の 創刊とその背景

中 西 直 樹

はじめに

『反省会雑誌』は、本願寺派普通教校の学生有志により結成された「反省会」の機関誌として、1887（明治20）年8月に創刊された。その後、1892年5月『反省雑誌』への改題を経て、1899年1月に『中央公論』に改められ、わが国を代表する総合雑誌へと発展していった。

『反省会雑誌』から『反省雑誌』への改題に際して、雑誌の発行主体は、反省会本部から反省雑誌社へと変更されたが、これは逓信省が会員限定の印刷物に低廉料金の郵送を適用しない方針を示したことへの対応であり、実質的に『反省雑誌』が反省会の機関誌であることに変わりはない。

ところが、日清戦争後、反省会の禁酒会員・同盟員の拡張路線が転換されると、『反省雑誌』の誌面も大きく変化していった。会員の読者層を意識した禁酒関連の報告や記事は次第に少なくなり、より広い読者の獲得を目指して学術的宗教論・文芸評などに誌面内容の充実が図られた。1896年1月には、英文欄が付録として掲載されるようになり、海外の読者を視野に入れた編集方針を採るようになった。

さらに同年12月、反省雑誌社が京都から東京本郷駒込西方町に移転したことで、『反省雑誌』は京都の反省会から独立した雑誌としての性格を強め、翌1897年1月には“*The Hansei Zasshi*”（『欧文反省雑誌』）が創刊された。この雑誌は、わずか数年で廃刊となったものの、海外へ日本文化・仏教の紹介を試みた貴重な文献といえる。しかし、散佚が著しく、すべての巻号を閲覧することが困難となっている。

今般、“*The Hansei Zasshi*”を復刻出版するにあたり、反省会と反省雑誌社の動向を検証することを通じて、同誌が創刊されるに至った経緯を明らかにしたい。

1. 日清戦争後の拡張路線の転換

反省会は、1886（明治19）年3月に普通教校の学生有志14名により「禁酒進徳」をスローガンに掲げて発足した。当初は正会員を普通教校学生に限定し、学生以外の会への賛同者を賛成員とした。その会員数は、『反省会雑誌』を創刊した翌年8月の段階で、正会員が99名、賛成員が36名に過ぎなかったが¹⁾、雑誌発行が号を重ねるにつれて次第に会員が増加し、創刊1年後の1888年8月頃には、正会員と賛成員の総数が1千名を超えている²⁾。

同年10月、本願寺派当局によって普通教校は文学寮に改組され、仏教学・真宗学の教育研究のための「考究院」と「内学院」とともに「大学林」に包括する方針（二院一寮体制）が示された。これによって普通教校は消滅し、その後身である文学寮は独立学校としての機能を喪失したが、これに対応して1889年7月に反省会の会員規定が改定、会の趣旨に賛同する者が誰でも正会員となれるように変更した。また、賛成員にかえて節酒同盟員と仏事禁酒同盟員を設け、地方支部規則を制定³⁾、地方会員の勧誘に向けて数名の地方委員を任命した⁴⁾。この結果、各地に支部が設立され、反省会は全国的組織へと発展し、会員数も1892年12月に1万5千人を超えるまで増加した⁵⁾。

同年7月、文学寮では、藤島了惇寮長・中西牛郎教頭をはじめとする全教員が解職となる文学寮改正事件がおこったが⁶⁾、翌93年1月に反省会本部の役員規定を改定し、2月に島地黙雷を会長に選出し、文学寮助教授・高等科学生を本部役員（主事・委員）に任命して新体制をスタートさせた⁷⁾。また、急増した会員相互の意思疎通を図るために地方支部の刷新も図られた⁸⁾。

こうして1895年4月の時点で、支部は岡山、陸奥、越前、下野、福岡、大阪、和歌山の7か所となり、会員総数は1万8千人を超えたが⁹⁾、この前後より会員の拡張路線は転換され、会員の増加傾向も鈍化していった。『反省雑誌』の誌面においても、1895年に入ると、地方役員の選任、地方支部の動向、会員・同盟員数などに関する報告が記載されなくなり、同年9月号からは「禁酒彙報」欄も「内外彙報」欄に改められた。

2. 拡張路線転換の背景

会員の拡張路線の変更には、いくつかの背景が考えられる。第一には、戦勝祝賀に沸く日清戦争後の世相のなかで、禁酒が広い支持を得られなくなったことが想定される。少し後のことであるが、1899（明治32）年11月、当時の反省会本部機関誌『反省』に掲載された一会員の投書には、次のように記されている。

十年以前は随分禁酒会が盛んであつた、我反省会も其の時代が最も盛んであつた、已来飲酒のへ弊害を論ずるもの次第に減じて、今日では直接に禁酒論をなすもの実に少い、此れ飲酒

家が少くなつたと云ふ理由から禁酒論を主張するものか、少くなつたと云ふなら一往聞えるなれど、決してそうでない、廿七八年の戦争以後は戦勝祝賀とか、記念会とか、又入営を祝するとか、曰く何々会、曰く何々懇親会とかの名義の下で、酒の需要は甚だ盛んだ、加ふるに今日は麦舗（ビヤホール）とか云ふ日本の居酒屋流のものが、甚だ流行するやうだが、実に寒心に堪えない¹⁰⁾

日清戦争が終結した1895年、京都では4月から7月まで第4回勸業博覧会が開催され、10月に平安遷都千百年記念祭の記念式典が挙行された。記念事業が相次いだ京都では、酒の需要も増大したようである¹¹⁾。

拡張路線の撤回には、反省会の主義を正しく理解していない会員が増えたことも背景にあったようである。同じく『反省』1899年5月号に掲載された投書では、反省会の拡張路線を撤回するに至った事情が、次のように述べられている。

抑も吾反省会たる、十又四年の昔本願寺普通教校の一隅に崛起し、禁酒進徳の旌旗を押し立て正義堂々、活気満々、昏睡没溺の社会の頭上に一大痛撃を加へしより、世の少しく平素此に概する者四方翕然として起て之に応じ、会員日に追うて増加し、会の支部各地方に勃興するもの十を以て数ふるに至り、一時全国に二万余の会員及同盟員を有し、宛然日本道德界の一大雄鎮として仰視せられたるも、而して今や其拡大なる外延に比対すべき内容に至ては殆と枯渇して見るべからず、遂に会員淘汰を執行するの止むを得ざるに至れり¹²⁾

この投書は、その原因として、①反省主義の説明疎漫なりし事、②会員並に非会員をして一般に誤解を生せしめたる事、③会の発達並に会員募集上慎重を欠きし事、④会員統一の機関完備せざりし事の4点を列挙しており、総じて、新入会員に対し主義を周知徹底するための方針・対策を欠いたまま、拡張路線をとったことを問題視している¹³⁾。会員の拡張に大きな役割を果たしたのは地方会員であり、彼らは禁酒運動による地域の風教改善を期待し、積極的な勧誘活動を展開した。これに対して前掲の投書は、反省会のスローガン「禁酒進徳」の内の「禁酒」は消極的側面を示すに過ぎず、多くの会員に「進徳」という積極的側面の理解が浸透していないと指摘している。

1896年1月号以降の『反省雑誌』に、毎号のように以下の反省会の「目的の一斑」が掲出されたのも、こうした理由からであったと考えられる。

反省会は経済上、衛生上、及道義上より、禁酒主義を唱導す、されども特に道德に関する、勸誡を以て、其中枢の目的とす、是吾党の所期我仏徳の感化力に依り、以て非禁酒の悪弊を矯め、社会の秩序を保ち罪戾を減し、教徒をして平和の清境に住ぜしめ、財政人種文明教育

の内護を企図するに在るを以てなり（傍点一筆者）

3. 反省会教育部の発足と発展

地方会員が「禁酒」一点に注力して勧誘活動を展開する傾向が強かったのに対して、普通教校・文学寮の出身者である本部役員は、仏教主義にもとづく「進徳」普及に向けた対応の必要性を痛感していたと考えられる。この結果、反省会本部では会員勧誘から教育部へと、活動の重点が移されるようになっていったと考えられる。

教育部は、1893（明治26）年2月に島地黙雷会長の下で発足した本部新体制により、3月1日に設置された。同月発行の『反省雑誌』はその設置目的を次のように報告している。

現時学生の弊風又言ふに忍びざるものあり。笈を都門に負ふ地方の学生は千百踵を接すと雖。滔々たる悪風に同化し其操行を破り。其志望を鎖し。父母恩資の膏血を以て徒らに一身墮落の資に供するもの比々皆然らざるはなし。

我反省会教育部は京地に在るの青年にして未だ完全なる学舎に入るを得ざるの子弟に向て。簡易なる普通の学科を教授し。我会禁酒進徳の主義を標準とし。厳に其品行を誓し。徳性を専らとして。純潔なる気風の基礎を養成せんことを以て目的とす¹⁴⁾

教育部には本科と別科があり、本科の学科目は仏教・国語・漢文・英語・歴史・地理・理科・数学・図画であった。別科は仏教の一科のみで、各宗の得度や教師試験の受験準備を目的としていたが、しばらくして本科のみとなった。教員には、反省会本部の役員（主事・委員）が担当し、彼らは文学寮助教授・高等科学生でもあった¹⁵⁾。

教育部は、学生自らの風紀改善からはじまった反省会の原点に立ち返り、後進を育成するという意味を有していたが、同時に1892年7月の文学寮改正事件により減少した文学寮の新入生確保という目的もあったと考えられる。改正事件以前の文学寮には、常に200名前後の学生が在学していたようである¹⁶⁾。改正事件では全教員が解職されて文学寮が一時休校となった後、9月に新校舎での講義が再開されたが、退学処分や自主退学が相次ぎ同年末に学生は85名まで減少していた¹⁷⁾。

こうした事情から教育部は、発足後の間もない時期から、文学寮の学生確保のための予備校的存在となっていったようである。発足当初の在学者は21名であったが、1893年5月に本部と教育部を、油小路花屋町上ル西若松町から北中筋北小路下る文覚町に移転し、寄宿舎を開設した。その後、6月に53名、7月に62名、8月に67名と順調に学生数を増やしていった¹⁸⁾。9月の文学寮の入学試験に際しては、教育部在籍の学生29名が受験し、2名を除き27名が合格した。この結果

を受けた教育部は、文学寮本科1年、予科2年、予科1年への入学便宜を考慮して、クラスを甲乙丙の三組に再編成した¹⁹⁾。

教育部の活動は、文学寮の学生募集に大いに貢献したと考えられる。1895年4月発行の『反省雑誌』には、文学寮の現状を「現今職員数二十余名、学生の全数二百五十名余僧侶の子弟多くして俗人の子弟旧時に比すれば大に減ぜるが如し」と報じており²⁰⁾、学生数が文学寮改正事件以前を超えるまで増加している。この頃から『反省雑誌』に反省会の関連記事は少なくなるが、教育部報告だけは断続的に掲載されていた。翌96年8月発行の本願寺派機関紙『京都新報』の報道によれば、教育部には当時165名が在学しており、創立から約3年半の間に在学した者は300余名で、文学寮への入学者は200余名の多数に上ったという²¹⁾。

4. 『反省雑誌』誌面の充実

日清戦争後には、『反省雑誌』の誌面充実も図られた。この点を確認するため、まずは1894(明治27)年から1896年までの『反省雑誌』の社説を以下に掲出しよう。

第9年1号(1894年1月発行) 現代の僧侶を論ず

2号(同年2月発行) 非禁酒の分類

3号(同年3月発行) 大いに海外に遊べ

4号(同年4月発行) 改革者としても禁酒家

5号(同年8月発行) 朝鮮に於ける今後の仏教

6号(同年9月発行) 伝道的教育

7号(同年10月発行) 捕虜に対する仏教者

8号(同年12月発行) 僧心なきの僧／社会に於けるの地位／宗教家の実は宗教家の外にあり／切に教界の学生に望む

第10年1号(1895年1月発行) 尤も希望ある尤も芽出度新年を迎ふ

2号(同年2月発行) 占領地伝道会社を起す可し

3号(同年3月発行) 奠都記念祭に就て

4号(同年4月発行) 過去及び将来の反省会

5号(同年5月発行) 本願寺の聖人

6号(同年6月発行) 台湾伝道に先ちて

7号(同年7月発行) 消夏の三策

8号(同年8月発行) 遼東還付地と各宗本山

9号(同年9月発行) 救世軍来る

10号(同年10月発行) 基督教会の不振

- 11号 (同年11月発行) 聖賢の精神
- 12号 (同年12月発行) 過る一年間の仏教
- 第11年 1号 (1896年 1月発行) 僧家の一大節約／仏教図書館
 - 2号 (同年 2月発行) 仏教改革と日本国民
 - 3号 (同年 3月発行) 万国宗教大会を開らくの議
 - 4号 (同年 4月発行) 釈尊に就て
 - 5号 (同年 5月発行) 開教局と欧米伝道
 - 6号 (同年 6月発行) 討究及び求道心
 - 7号 (同年 7月発行) 新教勃興の機
 - 8号 (同年 8月発行) 仏耶兩教徒の会合を評す
 - 9号 (同年10月発行) 仏教大に膨脹せざる可らず
 - 10号 (同年11月発行) 教界偶語／俗人的宗教

1894年7月の日清戦争の開戦以前には、禁酒関連の社説も散見するが、開戦以降にこうした社説は掲載されなくなり、仏教のあり方への提言がほとんどを占めるようになった。「現代の僧侶を論ず」(9年1号)、「僧心なきの僧」(9年8号)、「仏教改革と日本国民」(11年2号)、「俗人的宗教」(11年10号)のように、僧侶の腐敗と仏教界の不振を嘆いて仏教改革断行を主張した社説もあるが、やはり目立つのは、「大いに海外に遊べ」(9年3号)、「朝鮮に於ける今後の仏教」(9年5号)、「占領地伝道会社を起す可し」(10年2号)「台湾伝道に先ちて」(10年6号)、「開教局と欧米伝道」(11年5号)、「仏教大に膨脹せざる可らず」(11年9号)など、仏教の海外進出をにらんだ社説であった。

日清開戦後の『反省雑誌』には、積極的な仏教の海外進出を主張する社説が多数掲載されただけでなく、わが国の海外での認識を高めることを目的として、1896(明治29)年1月号から英文欄が付録として掲載されるようになった。

同時に『反省雑誌』の誌面充実が図られ、2月号よりは装丁を大型菊版から菊版に変更し、総頁数を40頁から80頁に倍増した。さらに8月号は、総頁数を92頁に増頁し、はじめて口絵に写真石板が掲載された。また4月には『反省の鏡』が創刊された。『反省雑誌』に掲載された広告には「決して高尚に失せず又卑俗に流れず、特に文章は平易流暢を旨として総て渉り仮名を付し、毎号挿絵を入れ、誰にても楽み得らる好雑誌なり」と記されており、反省会員と同盟員に対しては、『反省雑誌』と『反省の鏡』の二雑誌のうち希望により一方を無料で送付するとしていた²²⁾。

『反省雑誌』が学術的傾向の強めるなかで、多様な会員へ配慮した措置であったと考えられる。創刊から3か月を経て1896年7月に刊行された『反省の鏡』2号巻頭では、「一各地婦人教会との連絡を通じ其運動の景況を詳報すること」「一禁酒矯風慈善衛生等の材料を掲載するの外特に家庭欄の材料を増加すること」などが編集方針として示され、女性の読者層拡大を意識した誌面

へと変化していった²³⁾。

5. 東京移転と大谷光瑞の影響

1896（明治29）年12月、反省雑誌社は京都から東京本郷駒込西方町に移転した。しかし、『反省雑誌』に移転やその理由についての報告は掲載されていない。ただ、『反省雑誌』1895年2月号には、「東京の仏教と京都の仏教」と題する寄書が掲載されており、そこには次のように主張されている。

幾多の殿堂と幾多の巡礼者を見れば宗教界の動機は京都にあるが如しと雖も、是の如き虚形と狹隘なる信者のみを満足すべからざる文明的仏教徒の眼光を以て視れば、京都よりも寧ろ東京の方遙かに宗教世界の大勢を見るに便利なり、何となれば京都には幾多の仏教本山はあれども実は燈台本と暗くして、其活動しつゝある勢力、及び結果は殆んど見るべからず（中略）要するに京都は奉天府の如く仏耶両軍相對峙すと雖も、未だ最大決戦場にあらず然るに東京は恰も北京の如く仏耶の決戦場と云ふべき歟、然り而して東京にては単に仏耶の戦争にみならず、此外に尚ほ學術及び政治の強勢力ありて恰も英露諸国が日清戦争に於けるが如く、批評的の眼光を以て仏耶を評殺せんとす〔傍点一筆者〕²⁴⁾

同月発行の『佛教』掲載の「東京仏教の将来」でも、「先づ吾人が全国仏教徒の注意を喚起せんとするは爾来仏教諸般の運動をなす京都中心を改めて東京中心となすべきこと是なり」と記載されている²⁵⁾。日清戦争後、仏教躍進のために東京への拠点移転を主張する意見が高まりを見せていたようであるが、奇妙なことに『反省雑誌』だけでなく、『京都新報』『伝道新誌』『三寶叢誌』などの本願寺系新聞雑誌に反省雑誌社の東京移転を報じる記事を見出すことはできない。これに対して、通仏教系の『明教新誌』は次のように報じている。

●反省雑誌編輯部を東京に移す 本年一月誌面に大刷新を与ひしより世間に好評を博せる同誌は更に大に拡張を為さん為め此度編輯部を東京に移すことに決し其編輯員として多年同誌の編集に尽力せられたる桜井義肇氏は本月五日を以て該地を出発し東京に向ふ由就ては同氏は多年大学林助教授をも兼られたることなれば文学寮大学林生徒は去月二十八日午前八時より共楽館に於て盛なる送別会を開かれたり²⁶⁾

移転については、反省会会員からの反対が想定され、水面下で準備が進められたのかもしれない。それにしても、移転後においても報道がないことは、本願寺派嗣法の大谷光瑞（後に22代法主、法号「鏡如」）が関与していることを慮ってのこととも考えられる。中央公論社社長であっ

た嶋中雄作は、後の回想録で東京移転に大谷光瑞が関わっていたことを次のように記している。

茲に本社を京都から東京に移すべき時が来た。この謂はゆる東転に就いては、公私二様の理由が窺はれる。先づ公的な理由から語れば、日清戦争を契機とする異常な国家的飛躍が、この雑誌にも京都を活動舞台としたのでは不便だと痛感させ初めたことである。（中略）次ぎに私的な理由を語るためには、この間に是非とも大谷光瑞師を入れて考へなければならぬ。光瑞師が夙に、法門の常鱗凡介でなかつたことは、言ふに更である。あの豪宕闊達な性格は、鬱勃たる経綸に燃えて、一刻も静止しなかつた。暮夜ひそかに裏門から反省会同志を招き入れて膝を交へて談論した。やがては台坐に直つて法灯を継承すべき尊貴の師が「青書生」ど同坐して憚らぬ如きは、法灯影暗き本願寺の大奥にとつて由々しき大事でなければならなかつた。重役連は狼狽した。干渉と制肘が加へられた。京都は師の抱負を容るゝに余りに小さかつた。東転の気が萌えた。やがてそれが実現さるゝこととなつたのである²⁷⁾

嶋中雄作は、東京移転当時にまだ反省雑誌社に関与していなかったので、先代社長の麻田駒之助からの伝聞等をもとに執筆したものと推察される。

大谷光瑞が、いつごろから反省雑誌社に関わったかは詳らかではない。しかし、大谷光瑞は日清戦争下で病気がちな父光尊（法号「明如」）に代わって、その代理を務めるようになり、この頃から宗派内での影響力を強めていったと考えられる。1894年7月に日清戦争がはじまると、光瑞は翌月に大津分営・大阪師団・伏見分営などを慰問し、所属将兵に帰敬式を行った。このとき、光瑞は19歳であった。一方、父光尊は第5・6師団の慰問を目的に広島を経て熊本に到着したが、9月1日に病気となり、光瑞を電信で現地に呼び寄せた。光尊は9月15日に帰山し、光瑞は10月5日に帰山するまで、光尊の代理として、福岡・佐賀・佐世保・長崎・馬関（下関）・松山・塩屋・丸亀を巡回して駐留将兵を教諭し、帰敬式を授けるなどした²⁸⁾。

光瑞は、翌年以降も日清戦争の戦死者の追弔法要を修するため、95年には3月から広島、10月に北陸、96年1月から熊本、3月に松山などを巡回している²⁹⁾。ところが、同年7月『京都新報』は、光瑞が神経痛のため療養中であることを報じており³⁰⁾、翌97年1月に大阪富田林本照寺に病気の日野沢依（光尊実弟・光瑞の叔父）を見舞に訪れるまでの光瑞の動向は明らかでない³¹⁾。光瑞の病状は定かでないが、この時期に光瑞は本山重役の干渉と掣肘から脱するべく、ひそかに反省雑誌社の東京移転とその後のプランを練っていたと考えられる。

もっとも1904年3月に杉村楚人冠（広太郎）が『新佛教』に「『中央公論』は本願寺のだゝ子大谷光瑞の玩弄雑誌」との論評を発表して以降は、光瑞が『中央公論』のバトロンであることは広く知られるようになったようである³²⁾。

6. “The Hansei Zasshi” の編集体制

東京移転後の反省雑誌社の組織は、桜井義肇・麻田駒之助・篠原温亭の三人体制であり、この三人で編集・庶務・会計等のすべての業務を処理していた³³⁾。しかし、“The Hansei Zasshi”（『欧文反省雑誌』）には別に編集体制が組まれ、多くの人が関わっていたようである。

1937（昭和12）年10月発行の『龍谷大学新聞』には、「華水生」という人物の“The Hansei Zasshi”について、次のような回想文が掲載されている。少々長文になるが、以下に引用しよう。

大学院在学中には、同級生の一人廣田一乗師（早く故人となられた本派出身）に勧められて一年間英文の「反省雑誌」を編輯した事があつた。故桜井義肇氏が邦文の方の主筆だつた時代、東京駒込同氏の寓居で同じく掲載されていたのだ。

今考へて見ると此雑誌社ぐらゐ家族主義の横溢したまどゐは無かつた様だ、其頃は漢詩和歌の達人今では寺史の権威と知られる上原翁が采配を握り、阿部、龍江、篠原（後に国民記者となつて文名を馳せた）、麻田（永く中央公論の社主として有名）其他の勇者、猛者が雄弁、駄弁を闘はせ、談笑堂を撼かす頃、時には高楠博士の温顔が微笑を漂はせてひよつこり現れたこともあつた。

抑々此英文雑誌は日本精神を広く海外に紹介せんとする遠大の目的から、其の頃はまだ青年であつた本派の一偉人が特に発行せられたもので、随つて出資も潤沢、時間も鷹揚、思ふまゝに美麗な挿絵用紙もなるべく上等と、全紙に芸術味を盛り上げ得るのだから、自分も編輯に無上の興味を感じ、月末の数日は牛込の秀英舎に歩を運んで五校、五校又六校とインクに指を赤くしたものだつた。

何にしろ苦心の末かくして出来上つた殆ど全部を西洋の各大学、学会、主要な図書館に無償で寄贈してやるのだから、編輯者の悩みがちな物質的顧慮は全然無かつたので、自分は心のゆくばかり雑誌印刷の芸術化に其の一年を没頭したのであつた。あんな雑誌編輯ならば、も一度驚馬に鞭打つてなると、校正もいや監修でもやつて見たいと昔の夢にあこがれる事もあるが、是も亦た夢中の一夢かも知れない³⁴⁾。

反省雑誌社のあつた本郷駒込西方町は、本郷通りをはさんで東京帝国大学から徒歩数分の場所にあり、東京帝国大学の関係者が編集に関わつたようである。文中にある廣田一乗は、和歌山県本願寺派安楽寺の出身で、帝国大学文科大学哲学科に在学中に大日本仏教青年会の幹事として活躍した。大学院に進学し、その後、新潟県立新発田中学校長・愛媛県立松山中学校長などを歴任したが、病気のため1917年に没している³⁵⁾。廣田は、“The Hansei Zasshi”のVOL. XII. No.1とNo.2に英文論説を寄稿している。

華水生が誰であつたかを特定できていないが、廣田の文科大学の同級生で本願寺派寺院関係者

には、北畠貞顕と山内晋（卿）がいた。北畠は、三重県本願寺派広福寺の出身で、史学科卒業後に、岐阜県立大垣中学校教諭・愛媛県立西条中学校長・京都府立第四中学校長・京都府立図書館長などを歴任した。本願寺派の関係では、日曜学校講習会の講師などを務めている³⁶⁾。山内は、島根県本願寺派明恩寺の出身で、漢学科卒業後に、第三高等学校教授に就任し、本願寺派仏教大学講師も兼務した。後に勧学なども務めた³⁷⁾。龍谷大学との関係から推測するに、華水生は山内晋（卿）であった可能性が高い。

1897（明治30）年1月に欧州留学より帰国し、6月に東京帝国大学文科大学講師に就任した高楠順次郎も関わったようであり³⁸⁾、高楠は“The Hansei Zasshi” VOL. XII. No.1とNo.2にロシア語論説を寄稿している。また、同年8月発行の『反省雑誌』12年7号の広告によると、主筆は島文次郎であると記載されている。当時、島は東京帝国大学文科大学の大学院に在学中で、1899年11月に京都帝国大学法科大学助教授に就任するとともに附属図書館長にも補せられている³⁹⁾。ほかにも帝国大学の大学院生で関わっていた者がいたのかもしれない。

このほか、大谷光瑞の側近である上原芳太郎・阿部一毛・龍江義信らのことも書かれているが、彼ら3人は、1897年12月から、南洋の開拓地視察のためニューギニア・木曜島（オーストラリア）に赴いている⁴⁰⁾。また、雑誌創刊を主導した大谷光瑞自身も、後述するように、1899年1月以降に清国視察を果たし、その後にインド・欧州へと旅立っていった。このことから、反省雑誌社は“The Hansei Zasshi”の刊行だけでなく、本願寺派の海外進出に向けての拠点、交流の場ともなっていたと考えられる。

7. “The Hansei Zasshi”の創刊とその評価

こうして1897（明治30）年1月に創刊された“The Hansei Zasshi”は、口絵に日本の風俗や美術品などの木版刷錦絵をあしらい、本文では日本の宗教や文化を、国宝級の建築物や美術品のカット入りで説明した贅沢な雑誌であった。創刊に際して、『反省雑誌』に掲載された広告では、刊行意図を次のように説明している。

本誌は営利の雑誌に非ず、只我国の真価値を海外に輝かすを得ば足る、宗教美術等に関する材料にして外人に示さんことを欲せらるゝの人あらば、力めて誌上に紹介すべし、且つ欧米各国前後印度南洋等にある内外の仏教者其他に向て通信紹介等を依頼せらるゝの人あらば、本社は喜んで其労を採るべし⁴¹⁾

雑誌は毎号数万部が発行されて海外各地に発送された⁴²⁾。『反省雑誌』の広告によれば、海外の売捌きの代理店は以下のとおりであった。

米国 紐 育 インターネーション新聞会社
シガコ市 ラーブンコート出版会社
桑 港 ゴー、チー、マーシユ会社
英国 龍 動 ダブリュー、エイチ、スミス
同 ラウフレッドウイilson
壕州 ニュージーランド、エフ、チー、コルキル
印度 カルカッタ 大菩提会
其他東洋沿岸に各代理店あり⁴³⁾

“The Hansei Zasshi” について、国内の一般新聞では、『日本』が「仏教的事業として印度哲学の真光を海外に輝かさんとするは近來の美挙」と評し、『国民新聞』も「日本美術研究者の為に至良の材料たるべし」と論評するなど、概ね海外への日本仏教・文化の紹介を好評価した⁴⁴⁾。しかし、仏教系雑誌の評価にはやや厳しいものがあり、『三寶叢誌』は次のように評している。

西都の文壇に牛耳を取り遠く東都んも仏教文壇を睥睨して其英気を逆発しつゝ、ありし同雑誌は更らに其機関を拡充せんがため欧文雑誌をも発行し而も其編輯部を東京に移転せしめたり之が邦文誌上に於けるの体裁は例に依て例の如く如何にも口絵と云ひ其体裁頗る美麗に誌上採録の諸論記者苦心の程相見ゆるも本月発行の社論に至ては殆ど反省誌の社論としては如何かものにや所論妥当なりと雖、吾人は同誌の社説として今一層の多趣味なる者を望まざるを得ず其他欧文に露語を交へたる如き勿論刻下の急務なれども宗教雑誌は都ての華麗を衒らひ好奇を求むることを避けて可成的着実の程こそ願はしけれ⁴⁵⁾

その一方で、『三寶叢誌』は、同じく仏典翻訳の事業に着手した『佛教』に対しては、次のように高い評価を下している。

西京の反省東京の佛教と共に文壇に吾も人も其名の高きを知りたりしが近來佛教新春と共に益其新生面を開らき来りしが如く（魔訶、洹沙）英和共に連採するが如き実に誌上の一光彩にして論説時評の如き亦例に依て筆鋒密なりと覚ゆめり⁴⁶⁾

『佛教』誌自体も、“The Hansei Zasshi” 創刊号掲載の廣田の論説に誤記があることを指摘して、次のように苦言を呈している。

○廣田一乗氏 又同誌に「日本仏教各派」を掲ぐ、其の余りにひどき誤りあり、慧観を成実将来の祖としたるは未だしものなれど、其の来朝を崇神天皇の三十三年とは、ヨモヤ活字の

誤りとはか思はれされば、しばらくをく、道璿を華嚴の初祖とせば、同じく律、天台の初祖ともすべし、そも亦しばらくをくも、良弁を道璿の門下とは、思ひ切つた誤謬なり、吾輩は最初の欧文雑誌としては、もう少し慎しまれんことを希望せざる能はず⁴⁷⁾

おわりに

反省雑誌社と、『佛教』の実質上の発行主体であった経緯会とは、ともに東京にあり反省会会員が中心となっていた⁴⁸⁾。しかし、仏教の学術的側面において『反省雑誌』は、『佛教』に劣ると見なされていたようである。さらに『佛教』の後継誌ともいうべき『新佛教』が斬新な宗派仏教の批判を展開するようになると、『反省雑誌』改題の『中央公論』は、仏教論説から文芸欄を重視する傾向を強めていった。後に反省社（1899年に『中央公論』への改題とともに反省雑誌社を改名）では、1904年の高輪仏教大学廃止に関わって桜井義肇ら反省会関係者が一掃され、麻田駒之助の独裁経営体制に移行したが⁴⁹⁾、それ以前からの『中央公論』の総合雑誌化の傾向には、『新佛教』と仏教雑誌としての競合を避ける一面もあったと考えられる。

ところで、“The Hansei Zasshi”も長くは続かなかった。創刊2年後の1899（明治32）年1月号から“The Orient”（『東亞』）に改題されたが、1900年中には廃刊となったようである⁵⁰⁾。1899年12月には、大谷光瑞がインド・欧州に向けて出国していった⁵¹⁾。光瑞の関心が、文書による海外への日本文化の紹介から、現地での視察・活動へと移っていったことも廃刊に影響したのであろう。

その意味から言えば、“The Hansei Zasshi”は、大谷光瑞が自身の海外への飛躍の前提を意識して創刊したものであったと考えられる。同時に、光瑞による反省雑誌社（反省社）への介入と私物化とが、『反省雑誌』『中央公論』と反省会・反省会会員との関係断絶を決定づけたとも言えるであろう⁵²⁾。

註

- 1) 「反省会々報」第八（『反省雑誌』13年6号付録 1898年6月）、「本会報告」（『反省会雑誌』初号、1887年8月）。
- 2) 『反省会雑誌』初号（1887年8月）から同誌10号（1888年9月）までの「本会報告」に記載された正会員累計は184名、賛成員累計は830名であり、合計1,014名に達している。
- 3) 「本会報告」（『反省会雑誌』22号・23号、1889年9・10月）。
- 4) 「本会報告」（『反省会雑誌』5年4・8号、1890年4・8月）。
- 5) 「本会報告」（『反省会雑誌』7年7号、1892年12月）。
- 6) 中西直樹「明治期仏教教団の在家者教育の一齣—1892年「文学寮改正事件」（『雑誌『國教』と九州真宗』解題・総目次・索引』不二出版、2016年）。
- 7) 「特別広告」（『反省雑誌』8年1・2号、1893年1・2月）。
- 8) 地方支部の刷新の措置は、1892年末に地方支部規則の改正（『反省会雑誌』7年7号、1892年12月）、93年1月の地方役員規則の制定（『反省会雑誌』8年2号、1893年12月）以降に実施さ

れた。

- 9) 寄書「過去及び将来の反省会」(『反省雑誌』10年4号、1895年4月)。
- 10) 会員一小僧「禁酒小言」(『反省』1年8号、1899年11月20日)。
- 11) 中西直樹『本願寺と鉄道の近代史』第2章(三人社、2023年)、「酒の値上げ」(1895年8月28日付『日出新聞』)。
- 12) 13) 淡海生「反省会当路者並に会員の注意を促かす」(『反省』1年3号、1899年5月)。
- 14) 15) 「教育部報告」(『反省雑誌』8年3号、1893年3月)。
- 16) 1892年4月26日の文学寮校舎の新築落成式で、当時の藤島了穩寮長は、「普通教校以来茲に八年間縷学科を改定し規則を変更せりと雖生徒は常に二百名を出入せり」と述べている(『伝道新誌』5年5号、1892年5月)。
- 17) 『本山月報』32号、1892年12月1日。
- 18) 「教育部報告」(『反省雑誌』8年3～8号、1893年3～8月)。
- 19) 「教育部報告」(『反省雑誌』8年9号、1893年9月)。
- 20) 「京都宗教学校案内記」(『反省雑誌』10年4号、1895年4月)。
- 21) 「反省会教育部の現況」(1896年8月11日付『京都新報』)。
- 22) 『反省雑誌』11年4・5号(1896年4・5月)。
- 23) 中西直樹『真宗女性教化雑誌の諸相〔シリーズ近代日本の仏教ジャーナリズム第3巻〕』第1部第5章(法藏館、2021年)。
- 24) 東京黒面生 寄書「東京の仏教と京都の仏教」(『反省雑誌』10年2号、1895年2月)。
- 25) 「東京仏教の将来」(『佛教』99号、1895年2月)。この論説は、古河老川著・杉村廣太郎編『老川遺稿』(仏教清徒同志会、1901年)にも掲載されており、筆者が『佛教』主筆の古河老川であったことがわかる。
- 26) 1896年12月2日付『明教新誌』。
- 27) 嶋中雄作『回顧五十年』(中央公論社、1935年)。
- 28) 服部来浄編『両門跡慰問紀要』(久下時政、1895年)。
- 29) 「龍谷彙報・新御門跡芸備御巡化の概略」(1895年3月13・15・17・19・21日付『京都新報』)、「龍谷彙報・新御門跡北陸御巡化随行概略」(1895年11月23・25日、12月1・3・11・17日付『京都新報』)、「龍谷彙報・新御門跡の御発錫」(1896年1月29日付『京都新報』)、「龍谷彙報・新御門跡御帰山」(1896年2月14日付『京都新報』)、「龍谷彙報・新御門跡松山旅団追吊法会御親修」(1896年3月29日付『京都新報』)。
- 30) 「龍谷彙報・新御門跡御病氣」(1896年7月9日付『京都新報』)。
- 31) 「龍谷彙報・新法主親下御下向」(1897年1月9日付『京都新報』)。鏡如上人七回忌法要事務所編・発行『鏡如上人年譜』では、1896年6月23日に洛東内山に九条道実を訪ねてから、翌97年1月9日に日野沢依を見舞うまでの光瑞の動向に記載がない。
- 32) 楚人冠(杉村広太郎)「仏教青年評判記」(『新仏教』5巻3号、1904年3月)。このほか、1909年8月発行『新仏教』10巻8号掲載の越後曾根今昔閑人(投)「雑誌の今昔」にも次のように記されている。

これがまあ、緋の衣を着る活如来様が、その直系の臣麻田駒之助に命じて経営せらるゝ雑誌ときいては、田舎の御同行連が、どんなに驚く事であらう、ナニそんなに驚きもすまい。

また、境野黄洋「明治仏教回顧」(『新仏教』11巻7号、1910年7月)にも次のように記されている。

京都の方の雑誌では、『反省会雑誌』があつた、これは元来禁酒主義鼓吹のために、本派本願寺の普通教校連が始めたもので、極めて小さいものであつたが、後には新法主…今は、現法主…の保護を受けることとなり、東京に持つて来て、後に『中央公論』と改題し、次第に仏教臭味を脱する様になつたのである。

- 33) 前掲『回顧五十年』。

- 34) 華水生「学苑内外・雑誌の雑俎」（1927年10月25日付『龍谷大学新聞』）。
- 35) 中西直樹「明治・大正期東京の青年仏教者—徳風会から東京大学仏教青年会へ—」（『仏教文化研究論集』20号、2020年1月）、『官報』、「勝友会紀事」（『三寶叢誌』149号、1896年9月）、『教海一瀾』615号（1917年7月）掲載の死亡広告などを参照。
- 36) 前掲「勝友会紀事」、『官報』、『日曜学校講習会講義録』第1・3・4回（1916～1919年）、『京都府立図書館事業概要』（1969～2008年度）掲載「沿革」などを参照。
- 37) 前掲「勝友会紀事」、井上泰岳編『現代仏教家人名辞典』（現代仏教家人名辞典刊行会、1917年）、赤松徹眞ほか編『真宗人名辞典』法藏館、1999年）などを参照。
- 38) 鷹谷俊之『高楠順次郎先生伝』（武蔵野女子学院、1957年）。
- 39) 廣庭基介「島文次郎本館初代館長略伝」（『静脩』附属図書館100周年記念臨時増刊号、1999年11月）。
- 40) 上原芳太郎著『行雲流水』（有光社、1940年）、上原芳太郎著『明如上人畧年表』（真宗本願寺派護持会財団、1935年）。
- 41) 『反省雑誌』12年1号（1897年1月）掲載広告。
- 42) 『反省雑誌』12年8号（1897年9月）掲載広告。
- 43) 『反省雑誌』12年3号（1897年3月）掲載広告。
- 44) 『反省雑誌』12年1号（1897年1月）掲載広告。
- 45) 46) 「新刊紹介」（『三寶叢誌』155号、1897年2月）。
- 47) 第五子録「時事雑評」（『佛教』123号（1897年2月））。なお、執筆者の「第五子」とは、境野黄洋のことを指す。
- 48) 経緯会の中心人物である古河勇（老川）・西夜一六らは、普通教校の出身者で反省会会員であった（中西直樹『新仏教とは何であったか—近代仏教改革のゆくえ—』第7章、法藏館、2018年）。一方、反省雑誌社の編集の中心的役割は桜井義肇が担い、桜井が大谷光瑞の洋行同行で留守中は、梅原融を中心として、高楠順次郎・宝閣善教・梅原融・麻田駒之助・酒井慧眼・杉村広太郎（楚人冠）が担当したとされる（常光浩然『明治の仏教者』上、春秋社、1968年）。麻田と杉村以外は、いずれも普通教校・文学寮の出身者で反省会会員であった。
- 49) 前掲『回顧五十年』、前掲『明治の仏教者』上。
- 50) 現時点で、天理大学附属天理図書館所蔵のVOL. XV. No.3（1900年3号）以降発行の“The Orient”を確認できていない。
- 51) 前掲『鏡如上人年譜』。
- 52) 註32) で取り上げた楚人冠（杉村広太郎）らの『新佛教』掲載論説に、こうした大谷光瑞のあり方への批判的姿勢を読み取ることができよう。

〔補註〕本論の校正の途上で、深瀬基寛「島文次郎先生の思い出」（『英文学評論』4号、1957年3月、京都大学教養部英語教室）の文中に「華水・島文次郎」との記載を見つけた。本論引用の『龍谷大学新聞』寄稿文の筆者が島文次郎であったことを追記する。

〔付記〕本論に関わる調査研究は、2022年度～2024年度科学研究費補助金「基盤研究C」（研究課題「明治期におけるトランスナショナルな日本仏教の諸相とその動向」、研究代表 嵩満也、課題番号22K00088）、及び2023年度～2025年度度龍谷大学世界仏教文化研究センター仏教史・真宗史総合研究班プロジェクト「明治・大正期の龍谷大学関係雑誌」の研究助成を得て実施したものである。

また、本論は2024年度刊行予定の龍谷大学仏教文化研究叢書『The Hansei Zasshi（復刻版『欧文反省雑誌』）』の解題として執筆したものである。